元気で躍進　**地域経済**

環境優しい剝離剤開発

三重塗料　国交省のNETISに登録

ストリッパーの16㌔缶と湊副社長＝曽原町の三重塗料本社で

STRIPPER
STRIPPER
STRIPPER
eco

松阪市曽原町の三重塗料㈱（湊正俊代表取締役社長）が製造販売する土木鋼構造物用の水系塗膜剝離剤「STRIPPER（ストリッパー）」が、このほど、国交省の新技術情報システム「NETIS（ネティス）」に登録された。「中性型水系剝離剤ECO」と銘打った同商品は、沖縄県の高速道路整備に際し、サンゴ礁などの環境に配慮するため、同社の湊久幸取締役副社長（46）が代表取締役を務めるHMプラン㈱（本社＝同市垣鼻町）が開発した。剝離力は強く、しかも生態系に優しい特長がある。

橋などの鋼構造物の古い塗膜には、鉛やPCB（ポリ塩化ビフェニル）、クロムなどの有害物質を含む物があり、厚労省も2014（平成26）年5月の通達で「必ず湿潤化して行う」と定めるなど、除去する際には粉じんをまき散らさないよう剝離剤で溶かさなければならない。ところが剝離剤を塗布して深部まで染み込ませるのに1日かかり、その間に大雨が降って流出すれば、周囲の農地や海洋などの生態系に影響を与えてしまう恐れがある。

ストリッパーは、オオミジンコによる48時間急性遊泳阻害試験において遊泳阻害率0％。藻による72時間成長阻害試験では、成長阻害率マイナス2・1％、つまり阻害するどころか成長したという結果を得た。

沖縄のサンゴ礁守る

もともと同商品は、沖縄県で高速道路を管理するNEXCO西日本とのやり取りから生まれた。「沖縄は自然をすごく大事にする土地柄で、スコールに打たれて化学物質が川に流れてしまった場合、サンゴ礁にどんな影響が出るかという配慮が必要になる。担当の人が『どこに聞いても良い回答がない』と困っていた」と湊副社長は開発の端緒を話す。

HMプランでは3年前から開発に着手し、一昨年夏に完成、直ちにNEXCOでも採用された。関東地方の化学品メーカーで委託生産しており、三重塗料が製造元となって販売している。NETISの登録は、新型コロナウイルス流行の影響で手続きが遅れ、この2月16日に完了した。

湊さんは「沖縄だけでなく全国で使ってもらっている。三重県の環境のためにも役立ててもらえると思う」と話している。

HMプランは、UVライトを当てることで下処理工、下塗り工、上塗り工の各層の塗装状況を確認できる「クリスタルジュエリー工法」で特許を取得するなど、新しい塗料技術の開発を行っている。

衛生資材セットを寄贈

紙小津産業　コロナ発生時に役立てて

松阪市中央町に本社を置く包装資材卸・紙小津産業㈱（小津雅彦代表取締役社長）がこのほど、市内の介護施設や高齢者福祉施設で新型コロナウイルス感染が発生したときに活用してもらおうと、市に非常用衛生資材詰め合わせセットを寄贈した。感染が発生した施設からの要望を受けて市が配布する。

寄贈したのは、1人が1週間に必要になる食事用と衛生用の資材の詰め合わせを100セット分。1セット当たりの中身は▼大皿プレート100枚▼カップ（丼）150枚▼紙コップ（5オンス）200個▼割り箸150本▼ペーパータオル5袋▼マスク50枚▼携帯用アルコール5本▼ウエットティッシュ5袋▼使い捨て手袋200枚▼市指定ごみ袋（大）50枚―。

市役所で寄贈式があり、小津社長（39）から竹上真人市長に目録が手渡された。

小津さんは「私どもが取引させてもらっている介護施設さんが、コロナ

まちの声

ひとこと　言わせて

母と良い関係築いてくれた義姉に感謝

先日、母親の告別式を終えました。コロナ禍のため、親類縁者だけの家族葬になり、少し寂しい告別式になるのではと思っていましたが、無事、見送ることができました。

高齢にかかわらず、普段から新聞を読んだり、日記を書くことを習慣にしており、家族の意見に対して論理的に話されたときには、相手する家族も閉口した思い出があります。

親族で母の思い出を話し始めたとき、家族でも知らないことを義姉が話しだし、それがほほ笑ましい内容だったので、安堵（あんど）したのは親族誰でも思うことだと思います。

以前も実家の母親の様子を見に行ったとき、義姉の話が出てきて「いつも感謝している」とにこやかに話しているのを聞いて、安心していました。

世間では、嫁しゅうとめが悪口を言い合うのが常ですが、子供でも知らないことや、母親の日常の会話から、最後まで信頼関係を継続していたことが分かり、義姉にはとても感謝しています。

（松阪市内、男性、会社員）

すっかり忘れ去られている妖怪

正確ではないですが、わずか1年ほど前まで一世風靡（ふうび）したのに、すっかり忘れ去られている妖怪があります。私はこの忘れ去られていることが面白く、興味深いことだと思っています。

それはアマビエです。コロナがはやりだしてほどなく、江戸時代に描かれた絵と共に世を席巻し、さまざまなグッズが登場し、多くの人が描き、「アマビエ、アマビエ」とその名を口にしました。松阪市飯南町上仁柿に巨大なわらのオブジェが登場すると、私も写真を撮りに行きました。

その一大ブームの背景には、コロナの少しでも早い終息を願う人々のわらにもすがる思いがあったと思います。そういう意味では、飯南町上仁柿のオブジェは、アマビエだし、わらでできているし、これ以上のものはなかったことでしょう。

しかし、もう2年以上もコロナ禍が続くと、江戸時代の妖怪にまでもすがる思いも消え、すっかり忘れ去りました。今は、ワクチンや経口薬の完成を皆が心待ちにしています。やっぱり現代科学です。何だか、そんな当たり前のことを、誰も口にしなくなったアマビエをふいに思い出し、少し考えてしまいました。

（松阪市内、男性）

宛先
◎郵送　〒515－0821　松阪市外五曲町15　夕刊三重新聞社「編集局　まちの声係」
◎FAX＝0598（21）8500
◎Eメール＝info@yukanmie.com
夕刊三重新聞社

いきいき仕事女子 ㉜⓪

320

仕事内容　アクセサリー作家

ゴスロリと　ゆめ

saya工房
前田　さや香さん（37）

松阪市久保町のハンドメード作家・前田さや香さん（37）は、自宅工房でビーズのアクセサリーや小物、キーホルダー、布製のカチューシャなどを制作し、saya（さや）工房として市内外の手作りマルシェに出店している。

前田さんは千葉県市原市で生まれ育った。小さい頃から物を作るのが好きで、小学校では手芸クラブに入っていた。母親に「あなたは手先が器用だから歯科衛生士とか、やってみたら？」と勧められ、高校を出ると専門学校へ。

歯科衛生士をしていた20代の頃、友達が結婚する時にブーケやティアラを作ってプレゼントしていたのがきっかけで、頼まれて作るようになった。

東京で会社勤めをしていた松阪出身の夫と出会って結婚。松阪に引っ越して来てからマルシェに出店し始めた。13年前にsaya工房を立ち上げた。

小学1年生と年少組の2人の娘が
を寝か
工房に
3時ご
時間。
く、自
き合っ
うにし
ていっ
材料を
レーシ